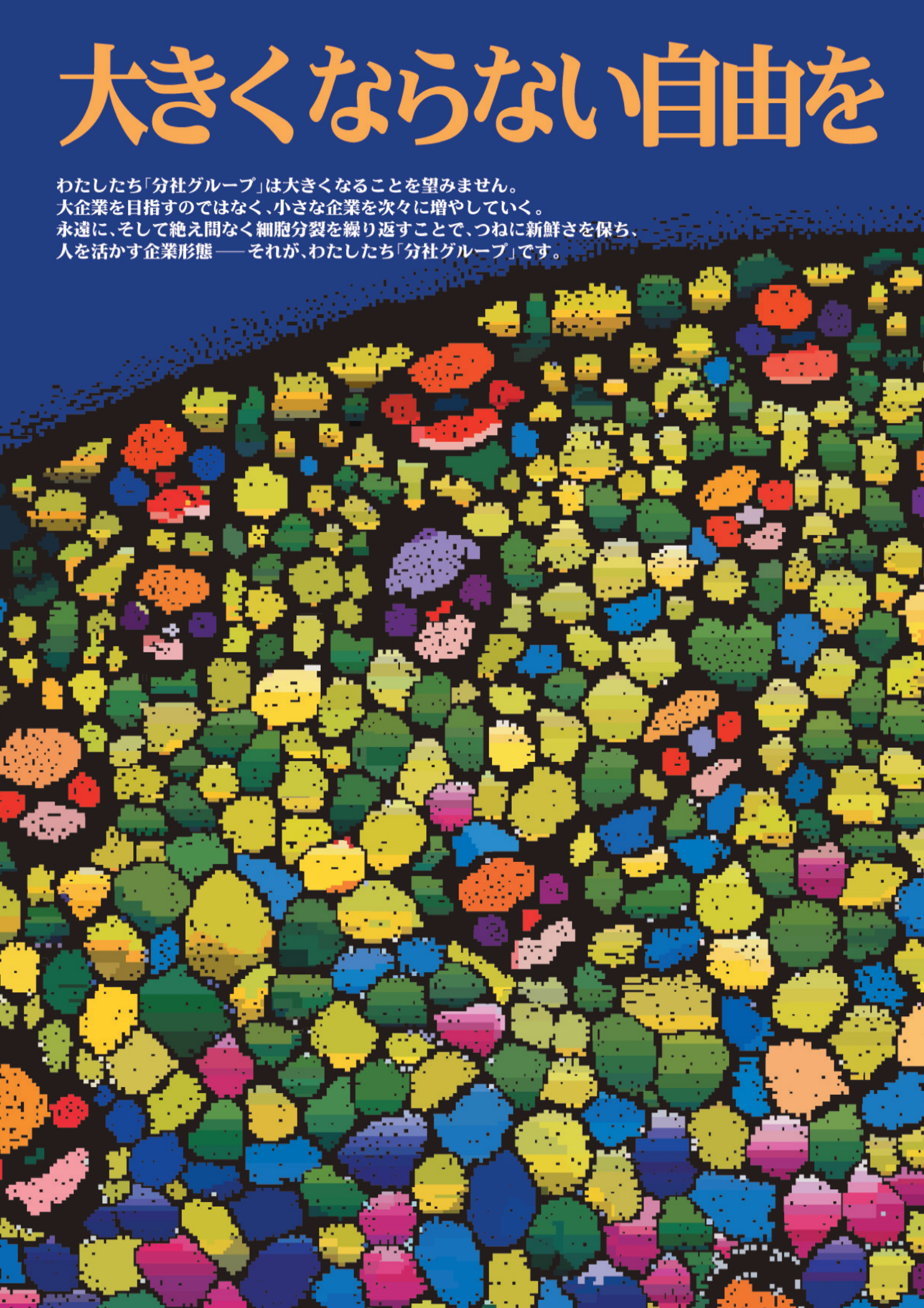


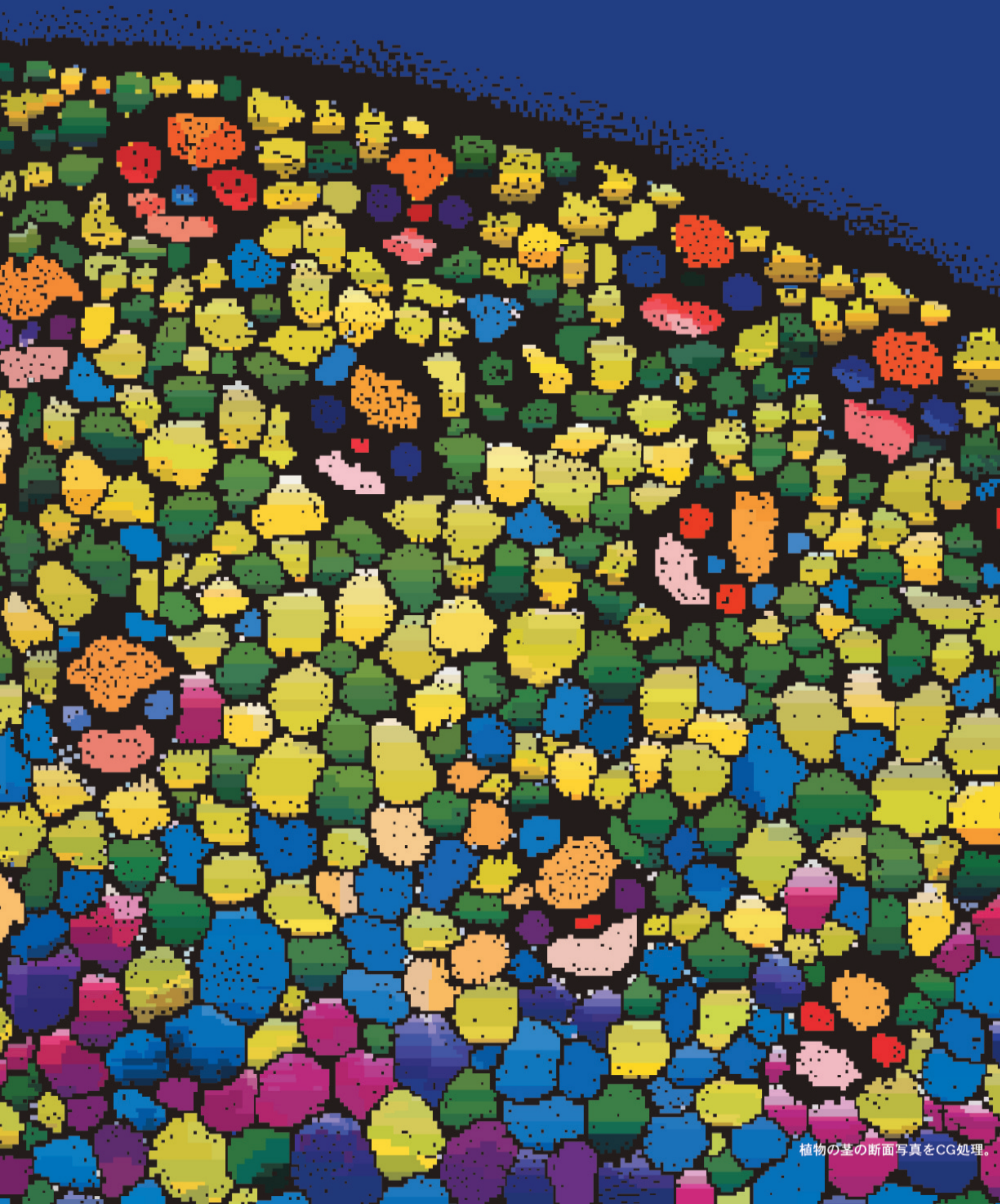
分社グループ

大きくならない自由を

わたしたち「分社グループ」は大きくなることを望みません。
大企業を目指すのではなく、小さな企業を次々に増やしていく。
永遠に、そして絶え間なく細胞分裂を繰り返すことで、つねに新鮮さを保ち、
人を活かす企業形態 ── それが、わたしたち「分社グループ」です。



選んだ



植物の茎の断面写真をCG処理。

一、威張る人、人にあらず。威張る上司、上司にあらず。
威張る上司は辞表を書くべし。

一、組織を分ければ、人は育つ。
分けぬ指導者は無能と知るべし。

一、分社の精神は野生の精神。
自然、本能の精神で励むべし。

一、分社グループは社長製造業なり。
社長を育てよ。育つまで育てよ。

一、分社グループはダイヤモンドのネックレス。
独立しつつ集合、集合しつつ独立すべし。

一、一人一社こそ究極の姿。
分社グループは一人一社に邁進すべし。

BUN

〈分社十則〉

一、象にダイヤは磨けぬもの。
小さく、強く、悠々行くべし。

一、分社こそ人を活かす最上の方法。
人を分け、会社を分けるべし。

一、人間はダイヤモンド、社員こそ真の財産。
人を磨き、輝かせるべし。

一、人生は苦しみもまた楽しきもの。
大いに泣き、大いに笑い、大いに満喫すべし。

SHA

鍛冶屋からスタートしたハイテク集団

分社グループの歩み

江戸期

元禄以来、酒井家は江戸で鍛冶職（農業金物、民具金物）を営む。口伝によれば先祖芝新堀町鍛冶金物屋伝右衛門は、忠臣蔵の天野屋利兵衛より依頼を受け、義士の忠誠に感じ討ち入り道具を作り、その義挙を助勢した。



▲酒井太郎吉



▲酒井尚吉

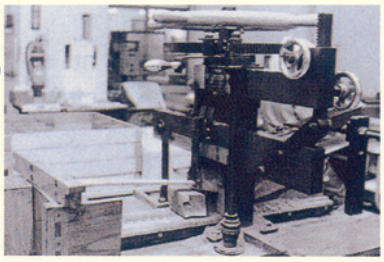
明治

19年 伝右衛門より十八代目酒井太郎吉、芝金杉川口町に「酒井工場」を創設。煙草細刻機械を製造販売する。

20年代 酒井工場は今日でいう旋盤、ボール盤、平削盤等の機械を自製する。

37年 煙草は製造専売となる。

40年



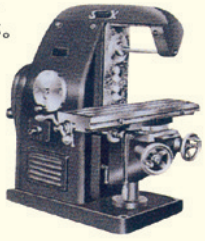
▶明治40年に大改造して、金賞を受賞した煙草細刻機械

専売局は煙草刻機械を統一するため、全国業者品評会を開催。酒井太郎吉発明の煙草細刻機械が最優秀金賞を受賞し、全国専売工場に一手納入する。



▲明治33年第108号煙草雑誌に掲載された広告

大正初期 当時の機械は鋳放歯車を使用していたが、機械の改良を志し歯切盤を輸入、本邦初の機械切り歯車専門工場となり「酒井工場」から「酒井鉄工所」に改称。



▲理研工業に納品 B型卓上フライス盤

昭和

8年 太郎吉三男、酒井尚吉は独立し、品川区大崎本町1-16に「酒井精機製作所」を開設。

10年 理化学研究所と取引を開始（理化学実験用機械機器を製作）。

13年 大田区に工場を移転建設。理研興業のR. B. M. 型卓上フライス盤ならびに卓上旋盤を製造し海軍監政本部に納入する。

17年 理研興業が中島飛行機の協力工場となると同時に、「酒井精機製作所」は精密工作機械の製作を停止し、中島飛行機製作所の直接の協力工場となる。

20年 空襲により、工場など焼失。

22年 酒井邦恭、資本金18万5千円で「太陽塗装工場株式会社」を設立。東京理化工業の業務用かま、キヤノン8ミリ映写機などの塗装を手掛ける。

24年 鈑金プレス業を開始。



◀第2期増築中の塗装工場（S27）

26年 「太陽工業株式会社」と改称。プレスと塗装業を中心とする事業を展開。

33年 組織を事業部制にし、売上高に応じて利益を社員に還元する「ゲーム制タイヨーシステム」を開始。後に分社制に発展。

34年 大田区矢口に工場を増設。

36年 樹脂成型技術を応用した電子部品マイラーコンデンサーの製造を開始。
産業用プリント配線基板の製作を開始。

37年 八王子工場を建設。産業用プリント配線基盤、塗装鈑金業を開始。

40年 現社名の「大陽工業株式会社」に改称。

41年 「大陽エレクトロニクス株式会社」（昭和60年インテグラン株式会社に商号変更）を設立、分社制の先駆けとなる。

41年 自動機事業部を設置し、コンデンサー自動選別機および自動エージング装置の製造販売を開始。



▲建設中の大昌電子（S43）

43年 「株式会社大昌電子」を設立。

44年 ソフトウェア部門を開設、大型コンピュータ向けのソフトウェア開発に進出。
「株式会社大和電子」を設立、片面および端子付きプリント配線基盤の製造販売業務を譲渡。

45年 「大陽企画株式会社」（損害保険代理業）を設立。
「山七資源株式会社」を設立（63年セブンヒルズ株式会社に商号変更）。

46年 「三陽技研株式会社」を設立。

47年 「富士精密株式会社」を設立。

48年 那覇市に「株式会社大幸電子」を設立（53年丸忠デジタル株式会社に商号変更）。



◀社員旅行はいちばんの楽しみ（S46）

49年 「大金電子工業株式会社」を設立、メカ式キャッシュレジスターの製造販売。
台北市に「東伸電子」を設立。

社会情勢

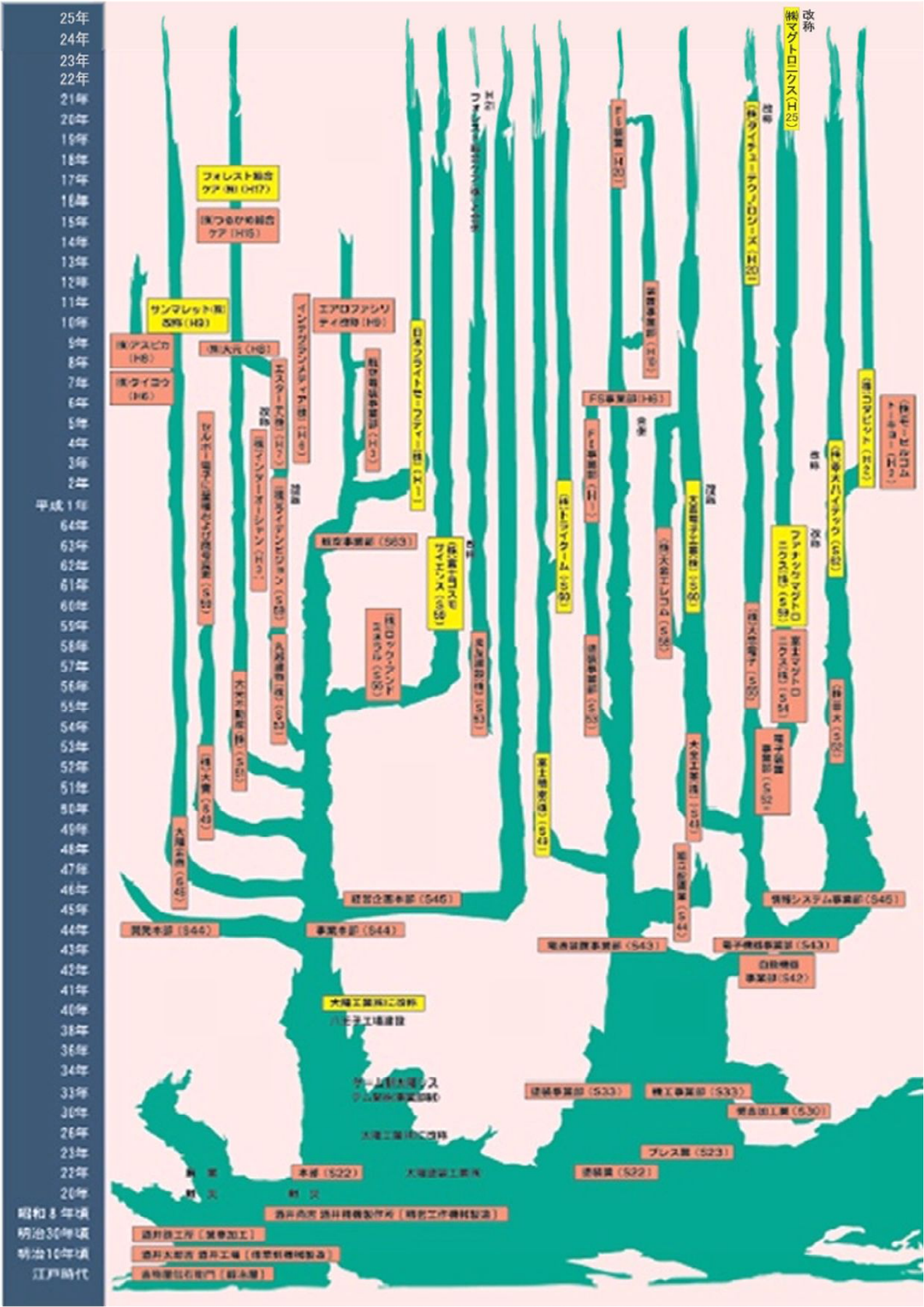
1887	東京に電燈がつく。
1889	東海道線全通。
1897	日清戦争始まる。
1898	キューリー夫妻、ラジウムの発見。
1903	ライト兄弟、初飛行に成功。
1904	日露戦争始まる。日本初の無線電話。
1905	アインシュタイン、特殊相対性理論を発表。
1908	T型フォード発売。GM設立。
1914	第1次世界大戦勃発。
1917	理化学研究所設立。
1923	関東大震災。
1924	IBM設立（CTRを改称）。
1925	ベル研究所設立。
1930	特急つばめ（東京ー神戸、9時間）運転開始。
1936	二・二六事件。
1941	太平洋戦争勃発。
1942	ミッドウェー海戦。
1945	日本は無条件降伏する。
1946	世界初のコンピュータENIAC完成。
1949	湯川秀樹、ノーベル賞受賞。
1950	朝鮮戦争勃発、特需景気起こる。
1951	民間放送始まる。
1957	ソ連、世界初の人工衛星打ち上げに成功。
1959	岩戸景気到来。自民党、所得倍増計画を発表。
1964	東海道新幹線開通。東京オリンピック大会開催。
1967	日本のGNPが世界第3位となる。
1969	アポロ11号月面に着陸。インテルの設立。家庭用VTRの開発。
1970	日本万博開催。IBM、コンピュータにLSIを使用。
1971	ニクソン・ショック。
1972	ローマクラブ「成長の限界」発表。
1973	第一次オイルショック。シューマッハ、「スモール・イズ・ビューティフル」を提唱。

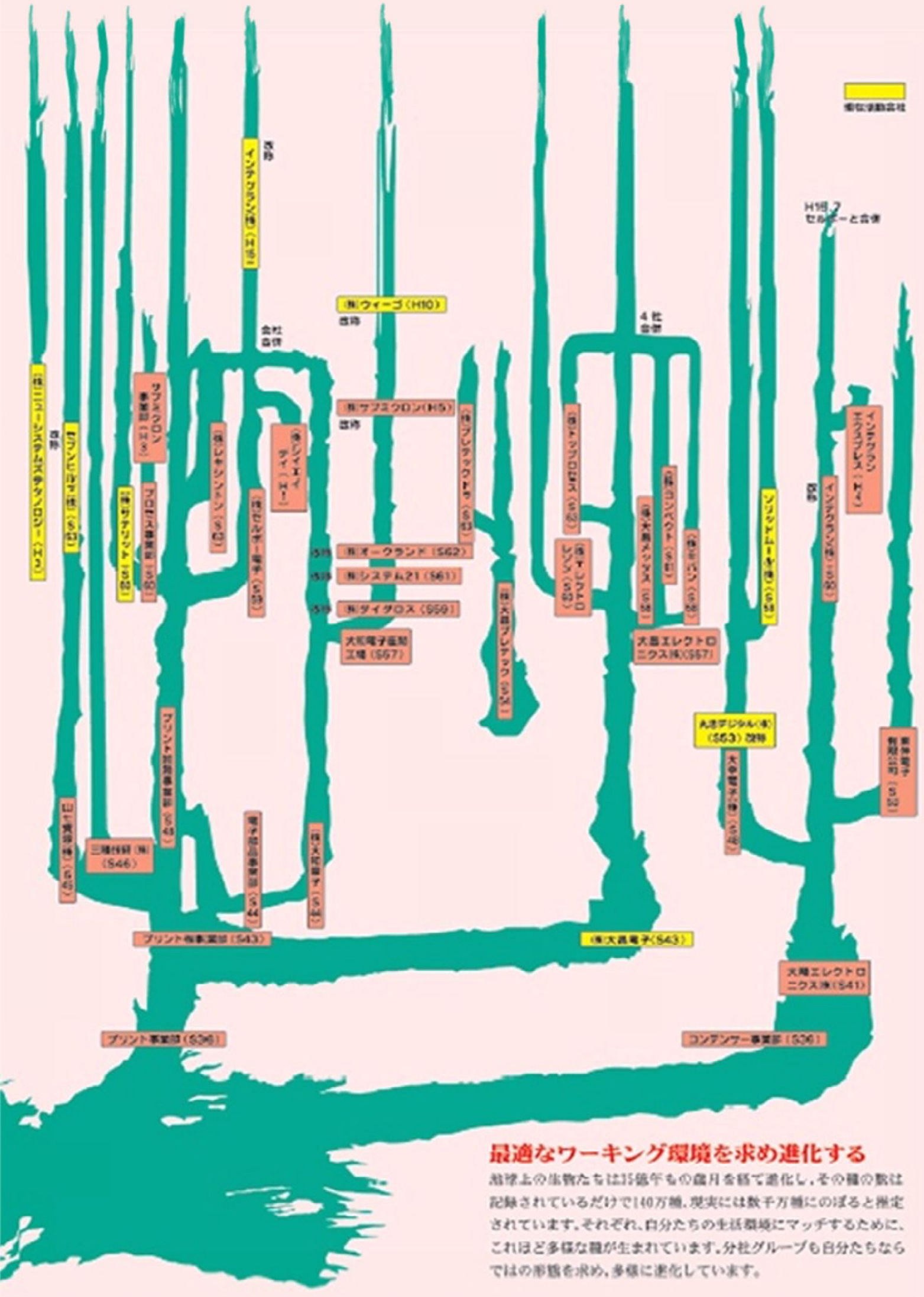
52年 「株式会社幸大」を設立(62年株式会社幸大ハイテックに商号変更)。大陽工業のソフトウェア部門を分離し、電子機器の販売を開始する。
53年 大陽工業に電子装置事業部を設置、産業用電子装置の製造販売を開始。
「大元不動産株式会社」を設立。
「丸越建物株式会社」を設立(平成3年株式会社インターオーシャンに商号変更)。
信栄建設株式会社の経営を引受け、後に「良友建設株式会社」に改称。
54年 大昌電子、「株式会社大昌プレテック」を設立。
大陽工業の電子装置事業部を分離、「富士マグトロニクス株式会社」(59年ファナックマグトロニクス株式会社に商号変更)を設立。
55年 大陽工業の電子機器事業部を分離、「株式会社大忠電子」を設立する。
「株式会社ロック・アンド・ミネラル」を設立(59年株式会社富士コスモサイエンスに商号変更)。
57年 「株式会社大和電子座間工場」を設立。
大昌電子、「大昌エレクトロニクス株式会社」を設立。
58年 大陽工業の塗装事業部で塗装ロボットを導入。産業機器向塗装の完全無人化を計る。
丸忠デジタル、「ソリッドムール株式会社」を設立。
大昌電子、「株式会社大昌メックス」を設立(61年株式会社コンベクトに商号変更)
大昌電子、「株式会社キバン」を設立、
大金電子工業、「株式会社大金エレコム」を設立。
大陽工業に設計事業部を設置。CADを使用しプリント配線基板の基板設計を行う。
大陽工業にプロセスセンターを開設、プリント配線基板のシルクスクリーン製版を行う。


▲大陽工業に塗装ロボット輸入(S58)

59年 大陽工業、設計事業部を分離、「株式会社セルボー電子」を設立。
60年 大昌電子、「エレクトロレゾン株式会社」を設立。
大昌プレテック、「株式会社プレテックドゥ」を設立。
大陽工業にプロセス事業部を設置、電子機器の構造設計および機械部品を切削販売。
「株式会社サテリット」を設立。
富士精密、「株式会社トライターム」を設立。
大陽工業、ヘリコプターエキュレーユAS350B(フランス製)を購入。
63年 大陽工業、東京ヘリポート内(新木場)にインテリジェント格納庫完成。航空事業部を設置しヘリコプターの販売及び整備の業務を開始。
大陽工業のプロセス事業部を分離し、「株式会社サテリット」に委譲。
大陽工業、運輸省航空局より不定期航空運送事業及び航空機使用事業免許を取得、不定期航空運送事業(二地点間輸送)を開始。(ベル社製ヘリ4機導入)
大昌電子、「株式会社トッププロセス」を設立。
大陽工業、神戸ヘリポート内にインテリジェント格納庫完成。
大陽工業の第一プリント事業部を分離し「株式会社レキシントン」を設立。
平成 大陽工業の航空事業より「日本フライトセーフティ株式会社」を分離独立。
元年 FE事業部(塗装関係)において近赤外線乾炉導入、短納期化を実現。
大陽工業、福岡市に航空事業所を開設。
大和電子、「株式会社シイエイデイ」を設立。
2年 幸大ハイテック、「株式会社コダビット」を設立。
大陽工業、「株式会社モービルコムトーキョー」を設立、
3年 「株式会社インターオーシャン」を設立。
大陽工業に「航空電装事業部」「電源事業本部」「サブミクロン事業部」を設置。
4年 インテグラン、「インテグランエクスプレス株式会社」を設立。
大陽工業、精密機械加工の「株式会社サブミクロン」を設立。
6年 「タイヨウ工業株式会社」設立。
7年 粉体塗装関連ハイテク機器の開発に着手。(伊藤孜)
8年 不動産管理「株式会社アスピカ」。
9年 「エアロファシリティー株式会社」設立。粉体質量流量センサーとこれによる粉体塗料定量供給装置を発表。
10年 「株式会社サブミクロン」を「株式会社ウィーゴ」に改称。
11年 大陽工業「(株)ニューシステムズテクノロジー」に出資。
13年 大陽工業「サーキットテクノロジー(株)」に出資。
14年 (株)大忠電子香港現法設立。
15年 (株)分社経営研究所設立。
(株)セルボー電子とインテグラン(株)合併。
16年 関山博オーナー逝去
18年 (株)大昌子電子栃木新工場建設。
セブンヒルズ(株)新工場建設、移転。
19年 (株)分社理念研究所設立。
20年 「(株)大忠電子」を「(株)ダイチューテクノロジーズ」に改称。
(株)サテリット新工場建設、移転。
(株)大昌電子、フィリッピン現法工場新設。
21年 良友建設(株)とフォレスト総合ケア(株)合併。
サンマレット(株)の保険業務をフォレスト総合ケア(株)に移管。

1974 日本は戦後初のGNPマイナス成長。
1976 日本電気が国産初のマイコン「TK—80」を発売。
1977 世界初の超LSIを開発(日本・超LSI組合)。
1978 A・ケストラー「ホロン革命」を発表。
1979 第2次オイルショック。
PC—8001発表(日電)。
1982 米、AT&Tの分割。
1983 エイズウィルス発見。
1984 LNS実験の開始。高度情報化社会の幕開けへ。
日米、牛肉オレンジ交渉。
1985 つくば科学万博開催。
プラザ合意により、急激な円高パニックに。
1986 高温超伝達物質の発見。
1987 高騰をつづけた株価が暴落(ブラックマンデー)。
NHK、24時間衛星放送開始。
1988 ニューロコンピュータの開発。
青函トンネル、瀬戸大橋の開通。
世界的マネーゲーム化。
1989 消費税導入。
ベルリンの壁が崩壊。
1990 東西ドイツの統一。平均株価2万円割れ。
1991 湾岸戦争の勃発。
ソビエト連邦が解体し独立国家共同体(CIS)に。
1992 ブラジルにて地球サミット開催。
1993 皇太子ご成婚。
ゼネコン汚職。
1994 不況長期化。政治低迷続く。
1995 阪神大震災。オウムサリン事件。
1996 エイズ薬害問題。
老人ホーム汚職。
1997 銀行・証券不祥事続発。
1998 長野五輪開幕。
1999 東海村で臨界事故。
2000 沖縄サミット開催。
2001 米国同時多発テロ。
2002 ワールドカップ日韓共同開催。
小柴昌俊ノーベル物理学賞。田中耕一ノーベル化学賞。
2003 米国イラク空爆。
2004 新潟県中越地震発生、柏崎原発被害。
2005 日本道路公団分割民営化。
2006 日本郵政株式会社発足。
2008 北京五輪開催。
ノーベル物理学賞、(南部・益川・小林)。
ノーベル化学賞、(下村脩)。
2009 オバマ氏、第44代米大統領に就任。


25年
24年
23年
22年
21年
20年
19年
18年
17年
16年
15年
14年
13年
12年
11年
10年
9年
8年
7年
6年
5年
4年
3年
2年
平成1年
64年
63年
62年
61年
60年
59年
58年
57年
56年
55年
54年
53年
52年
51年
50年
49年
48年
47年
46年
45年
44年
43年
42年
41年
40年
38年
36年
34年
33年
30年
26年
23年
22年
20年
昭和8年頃
明治36年頃
明治10年頃
江戸時代
改称
(株)マグトロニクス(H25)
(株)タイテュー・テクノロジーズ(H20)
フォレスト総合ケア(株)(H17)
(株)つるひめ総合ケア(H15)
サンマレット(株)SRS(H12)
(株)アスピカ(H8)
(株)クイコウ(H6)
(株)大元(H8)
エアロファシリティ信頼(H9)
インテグランメディア(株)(H6)
エスター大阪(H7)
(株)インターオーシャン(H7)
(株)ライテンビジョン(S59)
セルボー電子(株)(S59)
(株)大貴(S63)
大陽工業(株)(S63)
(株)ロック・アンド・ロール(S60)
(株)富士ロスサイエンス(S59)
日本フライトセーフティ(株)(H11)
航空事業部(S63)
航空整備事業部(H3)
FS事業部(H8)
(株)トライクーム(S59)
(株)大成エンジニア(S60)
大成電子工業(株)(S60)
(株)大成エンジニア(S55)
フタバテクマグトロニクス(株)(S59)
富士マグトロニクス(株)(S54)
電子機器事業部(S52)
(株)日本ビジネス(H2)
(株)ヤマトビルコム(H2)
(株)ヤマトバイテック(S62)
(株)日本(S52)
大陽工業(株)(S43)
(株)富士電子(S43)
経営企画本部(S46)
情報システム事業部(S45)
開発本部(S46)
事業本部(S44)
電装事業部(S43)
電子機器事業部(S43)
自動機器事業部(S42)
大陽工業(株)に改称
八王子工場建設
建装事業部(S33)
特工事業部(S33)
塗装加工業(S30)
プレス部(S23)
本部(S22)
塗装業(S22)
大陽塗装工業所
新宮
新吉
西井商店 西井精機製作所(精密工作機械製造)
西井鉄工所(製缶加工)
西井木型店 西井工場(精密機械製造)
鹿島屋石灰問屋(創業)


株式会社
インテクラン㈱（H10）
㈱ウィーブ（H10）
設立
4社
合併
H9.7
セルダー電子と合併
㈱ニッシンテクノロジー（H7）
㈱ケアシステム（H8）
㈱ニッシン（S62）
㈱セルダー電子（S59）
㈱システム21（S61）
㈱ダイクロス（S59）
㈱オークランド（S62）
㈱ブレテック（S63）
㈱トップロボス（S62）
㈱トレクトロニクス（S62）
㈱大昌メタス（S58）
㈱コンピュート（S61）
㈱ビット（S58）
ソリッドムービ㈱（S58）
インテクラン㈱（S58）
インテクランエクスプレス（H4）
㈱ケアシステム（H8）
㈱ニッシンテクノロジー（H7）
㈱ケアシステム（H8）
㈱ケアシステム（H8）
㈱ケアシステム（H8



BUNSHA

BUNSHA NETWORK

分社グループ各社案内

分社グループの始まりは、江戸時代の鍛冶屋。以来一貫して常に現場に密着して“お客様のための物作り”に励んできました。

戦後現大陽工業の創業者である酒井邦恭が関山博と共に焼け野原のなかから再出発、分社により社員の士気を爆発的に高め次々に事業を拡大、今日の分社グループに至ったものです。

変化の激しい現在では“伝統の匠の技術”を精密機械、電子機器製造に生かし“お客様とともに”の普遍の精神のもと人を百パーセント生かす経営を実践しております。